

打たずに鳴る太鼓

金子彦二郎

ある山寺にえらい小僧さんが居りました

まだ七歳のちつぽけな小僧さんでしたがその智慧のあること、いつたら、昔の太閤様が生れ變つて來たかと思はれる位でありました。和尚さんはいつも、其の機轉の利くこと、頭のよきはたらくことには、舌を捲いて驚くばかりでございました。ある時、まるで自分の心の中まで読み抜いてゐるやうな此の小僧さんに、一つの難題を與へて、流石の小僧も、これには閉口するだらうと思つて、おやゆび拇指で鼻の頭を弾きながら、くすぐつたいやうな顔をして小僧の顔

を見守りました。

「これ、此の頃はラヂオといつてな電線が無くとも遠方のお話や、音楽などが聞える便利なものが發明されて結構此の上も無いが、どうだ其方の才覺で、撥はたで打たずに鳴る太鼓を發明して貰はう、それからもう一つ袖振り坊主の轉てんで挺子舞こまひといふ餘興が見せて貰たい。何と工面して見てはくれぬか。」

といふのがその難題でありました。

さすが智慧のかたまりか、今太閤様かと言はれてゐる小僧さんも、この難題には、



すつかり面喰ひ氣味でありましたが、いつもの癖の圓い青剃り頭を二三度クル／＼まはすと、俄かに名案でも浮び出たらしく、清しい瞳をかゞやかして、

「え、畏りました。たしかに調へてまゐりませう。」

と言つてお辭儀をしました。

「あゝ、それではこの頼みを引うけてくりやるか。どうぞよいやうに。」

と大きくうなづいた和尚さんは、若干かのお錢を出してやりました。

「では往つてまゐります。」

其のお錢を懷に入れた小僧さんは、さういつて山寺から麓の城下町へとかけていきました。

小僧さんは或る大きな古道具の店に入りました。すると番頭が「何だ小ちやな小僧つ

子がやつて來たな。少しからかつてやらう。」と思つて、

「やあ、いらつしやいませ。だが此家は飴屋ぢやありませんよ。」

「なに、飴がないとな、そりや氣の毒だな。」
「なせです?」

「いや、飴を百圓ほど注文して、うんとお前の店に儲けさせてやらうと思つたのに。」

とかう事もなげに言ひ捲くつてから「これは!」と驚いてキョト／＼してゐる番頭を氣持よささうに見やりながら、

「それはさうと、お前の店に、皮の破けた太鼓はないか。」

この不意な、而も奇抜な註文に、ますます面喰つた番頭が、目をぱちくりさせて、「へえ、皮の破けた太鼓ですつて?ご、ご



戯談でせう。」

「いや、戯談でも何でも無い。是非ともさういふ破れ太鼓が入用なのぢや。」

「へえ、真面目なお話なんです。私は又やはり飴の百圓のたぐひかと思つてゐたんですが……一體何になさるんです。」

「何に使はうと、そりやこちらの勝手ぢやあつたら買つてやらうといふのに文句はいるまい。」

「さうおつしやられては口も利けませんが……さあ、皮のよい、音のよいのは、あれあそこに三つ四つ積んでございますが破れ太鼓は……」

「無いと申すか。」

「いや無いこともありませんが……とにかく土藏の隅つこを捜して見ませう。(小聲にいや飛んでもないお客が飛び込んで

来た。」

とぶつ／＼言ひながら、奥へまゐりました。暫くたつてから番頭は、額から頭にかけてもぢや／＼に引かぶつた蜘蛛の網をかき拂ひながら、

「いや、どうもひどい目に逢ひました。一つございました。何しろ破れ太鼓が欲しいなど、仰しやる物數奇なお客様の見えたことがないので、何十年このかた見廻つたことのない土藏の二階を捜したもんで。……え

小僧さんこれでもよろしうございますかと言つて一抱へもある古太鼓を前に据ゑました。

つく／＼検めてゐた小僧さんは、

「あゝ、なるほど、こゝが破けてゐるんだね。うむ、こつちも。いやこれで結構々



々。全く註文通りの代物です。時に如何程にして下さる。」

「え、お代はよろしうございます。只で差上げますからお持ちかへり下さい。こんな太鼓はいつまでおいても賣れさうになく、お蔭様で始末がついて却つてこちらの仕合せですから。」

「それや、お氣の毒ぢや。が、さういふことなら遠慮せずに頂戴して行くぞ。」

「へえ、どうぞ御自由に。」

小僧は自分の體よりも大きな太鼓を、ちやうど蟻が豌豆でも引つぱつて行く恰好でやつと山寺の近くまで運び上げました。

流れる汗を拭つて、暫く休憩してゐた小僧さんは今度は寺の屋敷の隅の大きな朽木の根方まで其の太鼓を運びました。

朽木の根方に小さな穴があつて、そこか

ら頻りに齧り合はるものが匍ひ出ては何處かへ飛んでいきます。それは言はずとも知れた、蜂の巢です。其の小穴の處に太鼓の破れた穴を當てがつておいてから、小僧さんは木のうしろにまはり、お握飯位の大きな石を拾ひ取つて、コツ／＼其の朽木に打ちつけました。

びつくり／＼したのは朽木の空洞にゐた蜂どもです。

「や、や、何かな、あの音は。」「私達のお城が毀されるんぢやないか。」「早く逃げろ、／＼。」とでもあわて騒いでゐたのでせうがそれらはすべて人間の耳には「ブーン」「ブーン」ただけしか聞えませんでした。

とにかくあわてふためいた蜂どもが二三疋四五羽と一かたまりになつて出口へ向ひました。「何だか何時までも暗いな。今か



ら日の暮れる筈もなし。まだ外ぢやないのか。」と變に思つてでせうが、何分あわてかへつてゐるので、「それ／＼、もつと前へ進め、ぐづ／＼してゐると屋臺骨がおつこちて來て皆下敷きになつちまふぞ。」と後からどなるものですから、向ふ見ずに皆駈け出しました。どこまで行つても眞暗で、コツン／＼と頭ばかりぶつかるので、ふと氣がついて見ますと、何百疋の蜂どもは、大きなく／＼まつ暗な牢屋の中に投げ込まれてゐたのでした。

「もう大丈夫」と思ふ頃、小僧さんは其の太鼓を朽木の所から他所へ移して、かねて用意しておいた紙で其の皮の破れ目を貼り塞いでしまひました。そうして側へ寄つて聞いて見ると、うろたへてゐる澤山な蜂どもが、あつちに「ぶつかり、こつちにぶつ

かりするので、小さいながら「ドン／＼」「ドンドン／＼」といふ妙竹林たけのこな音がします。

「これでよし」とうなづいた小僧さんはやがてお庫裡の入口にひよつくり現れました。「和尚さま、只今やつと歸りました。御申しつけの撥で打たすによく鳴る太鼓をやう／＼のことで求めてまゐりました。」

と言つて、お茶の間でお茶をのんでゐた和尚さまの前に据ゑました。

「おゝ、出來した／＼。うん、それが打たすに鳴る太鼓ぢやな。どれ／＼。」

と言つて、近寄つて來ました。

「あゝ、鳴る／＼。なるほど、こりや面白い。ドンドン、ドンドン、ドンドン。小僧大儀であつたぞ。」

といつて、にこ／＼して喜んでゐましたが



さあ和尚さまは、其の中の仕掛が見たくて
たまりません。でも小僧の手前を憚つて、
おとなしく皮に耳を當て、見たり轉がして
見たりして楽しんでゐましたが、たうとう
我慢がしきれずに、破けた處に膏藥貼りに
してある紙を剝がして覗き込みました。

この時です。おさきまで暗な太鼓の胴の
中に、盲目滅法にあればまはつてゐた蜂ど
もは、急にそこに一道の光がさし込んで活
路が見出せたものですから、我勝ちにとそ
の破れ目をめがけて詰め寄せ、明るい世界
に飛び出さうとあせりました。

が、やつとの思ひで逃げ出したと思つた
ら、すぐ又そこに大きな目玉と赤ら顔の頬
とが邪魔をしてゐました。明るみへ突進す
る喜びで一ぱいな蜂どもは當るをえらばず
目でも鼻でも、ところさらはずチク／＼と

毒の刃で刺し通して、飛び去りました。

不意の狼籍者のしかも情容赦もない攻撃
に、「アイタ、アイタ、タツ／＼／＼／＼」
とからだ中に火でもついたかのやうに、
手を振り頸をふり目をしかめ、口をゆがめ
地團太踏んで狂亂しました。

其の様子があんまりをかしいので、側で
見てゐた小僧はキヤツ／＼笑ひくづねなが
ら、大きな聲で、

「エー、只今演じてをりまする所が、袖振
り坊主の轉挺子舞ひ——」
と節おもしろく口上を申しました。

(一四、三、二八)